

中 等 教 科
新 編 習 字 帖

成 瀨 大 域 書



森 岡 書 店 發 行

K226.92
6

永字八法用筆略解



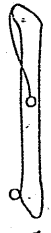
側
 ○より筆鋒を空画し尖處に至りて筆を落し直ち頓挫して右に轉し又斜に下りて筆鋒点の中心に至り時左下を挑出せ



擧筆 平行 落筆

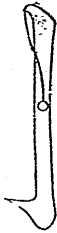
勒

少しく仰鋒にて○より空画尖處に至り徐ろに頓挫して上方を向ひ半ばより平行に○にて鋒を挫き左へ放還す則ち側を延べたるか如し



弩

左鋒より○より空画す則ち勒を豎して裏面より見たる如同し



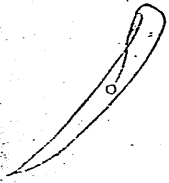
趯

左下へ斜に廻轉して奔然挑出ま可し



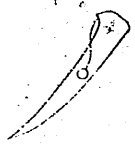
策

勒を中央にて断ちたるが如し○より空画し仰鋒ありて斜に右を向て仰攸す



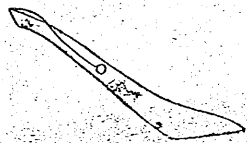
掠

左鋒にて○より空画し鋒を尖處より右へ挫き斜に左へ利し出す可し



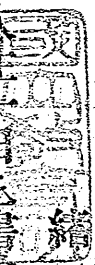
啄

掠法に同し



磔

右鋒より少しく仰き○より空画落筆して僅ろに平行一折して右下を引き一折止まらむとして止まらず起伏遲滞の間に又一折し開窄抜出して左へ還す





礪

右鋒ふして少しく仰きより空画落筆して僅うに平行一折して右下ふ引き一折止まらむとして止まらず起伏遲滞の間に又一折一開窄抜出して左へ還す

言

人生一日も書をなかる可らず是を以てか古來之を教育の第一義に置く重蒙漸之事を解するに至れば先づ之に授くるに文字を以てす蓋し筆札と記誦とは人道の始めにして又其靈長たる所以なり故を以て人皆之を學はざるなし然れども其法を得ずんは多年屹々として刻苦するも終に徒爲たらんのみ苟も能く之を得て學は、義献の堂と雖も窺ひ難しとせざるなり今や文運昌盛を極め教化の具備はらざるなく牧童漁兒に至る迄皆能く文字を知る然れども獨書法に至つては漸く世と共に下りて上流の貴紳と雖も拙劣見るに堪へずして其品格を傷ふ者比々皆然り中學の令布かれて已に久しく百科の學粗完備せりと雖も習字の一科に至つては混沌として有れども無きか如く其教授の法に於ても賸焉昧焉劃一の良法に乏しく人に依て其法を殊にし多くは徒らに近代書家の筆に就て臨習せしむるに止まる書法に至ては敢て之を辯説する者なし従つて生徒の輕侮を招かむとす然るに教育の任にある者往々之を等閑に付するは何ぞや書は果して學ふに足らざるか將た學ふに良法あらざるか若し斯の如くにして推移せば則ち十年を出すして日用往復の書は勿論己の姓名をも優に書し得る者なきに至らん事必せり是豈嘆す可きにあらずや予拙陋自ら揣らす斯道の爲め書法の正しきを以て聞えある大域成瀬温氏に乞ひて聊か此篇を修し以て中學教育に資せんとす舉實に倉卒に出て固より缺點の多きを免かれず幸に教育家諸君の示教を待て漸次完全の域に進ましめんとを期す

編成要旨及修學注意

一本書は専ら中等教科の目的を以て編成し、前篇六巻より次で漸次楷行艸三体の小字を學ばしめんとす、故に尋常中學校師範學校高等女學校は勿論、高等小學の補習科若しくは小學教育を終りたる者もして猶斯道を修めんと欲する者之は依て學ばし益する所少からざるべし

一筆勢の孫落健なる如き一見妙趣多きも似たるを以て初學往々好んで其弊を學び奇癖亂雜醜体見ると忍びざる者多し本書の字々正格筆々謹慎誠に中學習字科の最良教科書ならん事を期する者なり
一本書第壹卷を指書の、御制和歌及教育、勅語とし第二卷を行書の格言、及韓文、公符、讀書城南、とし第三卷を平假名交りの書翰、文として艸体の應用を學ばしむ其擇ふ所聊か學生風教の助けとならんことを努む學者一字一句筆を下すも苟もせずんば單に書道を知るのみに止らざるべし

一楷行草三卷各壹卷を以て毎壹學期に充つ然れども中學習字科の僅少なる時間能く斯道を窺ひ得べきふあらず別に家庭に於て充分に練習せんと必要なり又已に練習せし文字を時々臨本を去つて白紙に試みん事を切望す

一凡そ漢字の數幾萬を以て數ふ可く其形亦千變萬狀なりと雖も尤も主要なる原則の七十二にして之を種々又連結配合したる者に外ならず而して更も其源を尋ねれば僅かよ永字の分解八割に歸す因て前編已に若干の必要なる原則と其變化應用とを學ばしめたり故に本書再び之を説かず學者須く先づ前編に就いて之を學び然して後此編に入るべし
一紙の白うして厚く滑かにして堅韌なるを佳とす硯の石質密にして硬く寬くして能く黒色を發するを瓦とす用むたる後は能く洗滌す可し
一墨の黒くして光りあるを撰ひ徐かき磨りて濃きに至るを要す若し磨ると急劇なれば墨汁粗惡よして其色煥發せざればなり磨墨の後の暫らく放置し硯面の燥くを俟ちて用ゆるを可とす
一筆の毫毛健よして圓く長くして尖りたるを撰ふ可

し使用の法の一、寸の筆頭よして其五六分を搥き能く墨汁を含ませしめて徐ろよ運べば紙墨相和し清麗温然として見るべし凡う大小の筆此の如くす其用むたる後の必らず能く之を洗ひ清めて丁寧不藏む可し

一執筆の法大字の提腕中字の懸腕小字の枕腕とす提腕とい腕を空中に提ぐる者に於て懸腕とは猥りに臂を張るの謂にあらざる手腕紙上を離るべし凡そ一寸臂の僅に机面よ接せざるを以て度とし畢竟手腕の導送よ便なるを要す

一筆頭は筆管と一様に直なる方を表とし少しく張りて圓なる方を裏とす楷行には垂直にして少しく左上に向らしめ草書に少しく左に向はしむ

一楷行の筆頭を去ると二寸師書の三寸にして大指の頭と食指の第一關節とを以て堅く之を執り深く中指を釣けて少しく筆の前に掣くが如くし無名指の筆を爪肉の際につけて上よ掲げ小指を添へて力を強くす可し

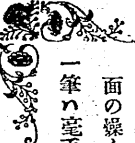
一心正しければ筆正しく筆正しければ字も亦正しかる可し凡そ字を寫さんと欲して已に筆を執る先づ氣力を静め姿勢を正し腰脚腕指総て力を充たし荷も放心す可からず

一首を正して胸を張り脚を開きて腰を据へ左手を机上の左方よ安置し右手を胸前に伸べて筆管を正しく鼻梁に向けて把り眼は常に筆頭に注ぐ可し

一字を寫すには十運五急を貴ふ筆を落すや丁寧蕭筆を運ぶや細心緩行荷もすべからず殊に楷書にありては用筆緩舒ならざれば自ら法則を失ふ可し

一中畫あるの字には堅畫を間と云ひ横畫を架と云ふ中畫なき字には堅畫を結と云ひ横畫を構と云ふ一點一劃間架あり結構あり約言せば間架は鈞合にして結構は組立なり之を家に例へんか棟梁柱礎止しく其權衡を得ざれば暫くも立つ能はず猶ほ人の体格に置ける如し其正を失へば畸形不具見る可からざる也學者尤も留心す可し

見	見	文	文	乃	乃	叶	叶



一 墨の黒くして光りあるを撰ひ徐か磨りて濃きよ
 至るを要す若し磨ると急劇なれば墨汁粗惡よして
 其色煥發せざればなり磨墨の後の暫らく放置し硯
 面の燥くを俟ちて用ゆるを可とす
 一 筆の毫毛健よして圓く長くして尖りたるを撰ぶ可

一 點一劃間筆あり結構あり絶言せば間架は鈞合にし
 て結構は組立なり之を家に例へんか棟梁柱礎正し
 く其權衡を得ざれば暫くも立つ能はず猶ほ人の体
 格に置ける如し其正を失へば畸形不具見る可から
 ざる也學者尤も留心す可し



平

子

留

留

度

度

尔

尔

於

於

如

母

母

母

富

富

加

加

奈

奈

一

每

己

己

我

我

治

治

我

我

五

巳

流

流

久

久

珥

珥

波

波

山

伊

獨

獨

濃

濃

美

美

思

思

聖

德

和

柔

苦

苦

良

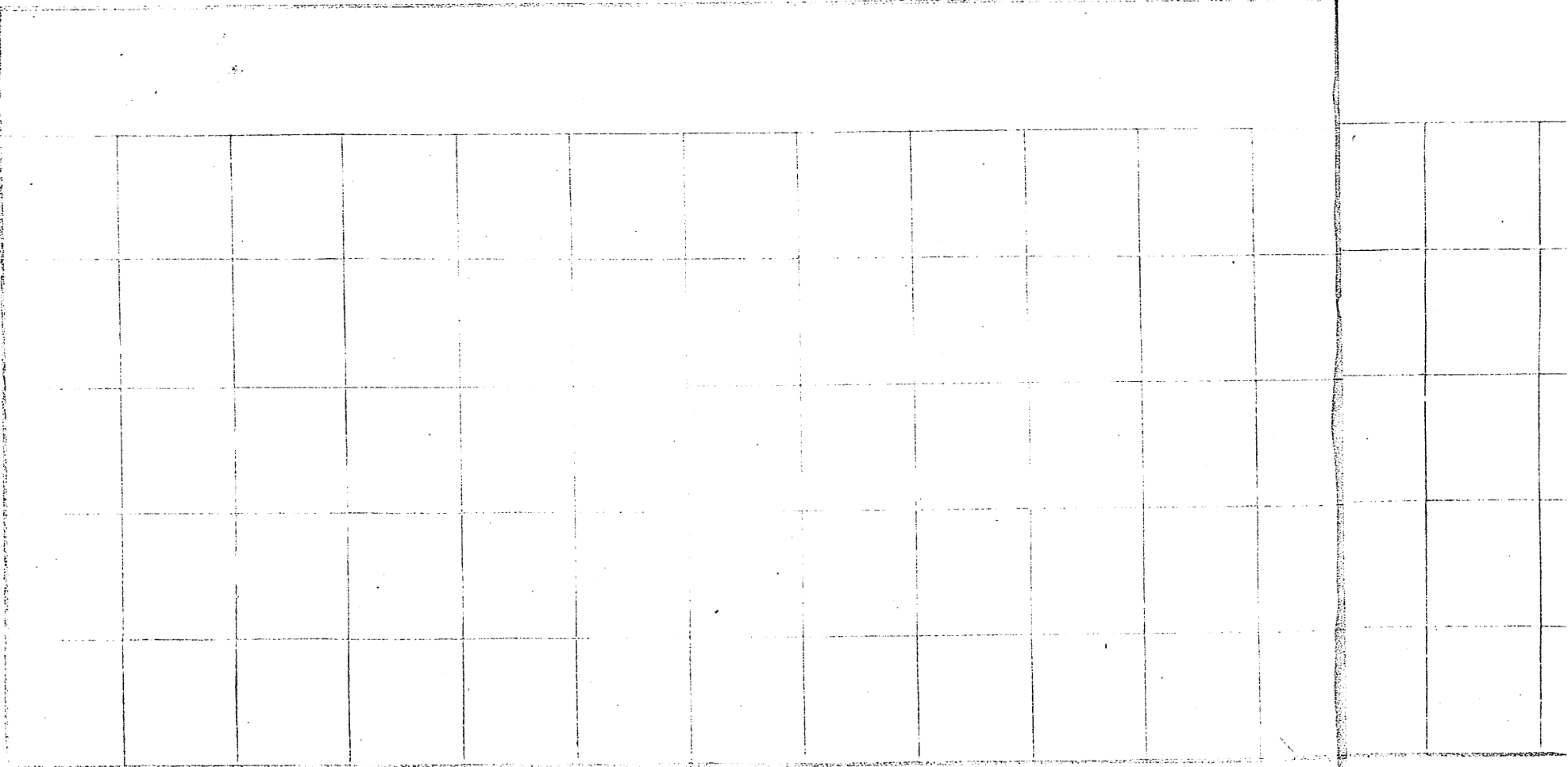
食

年

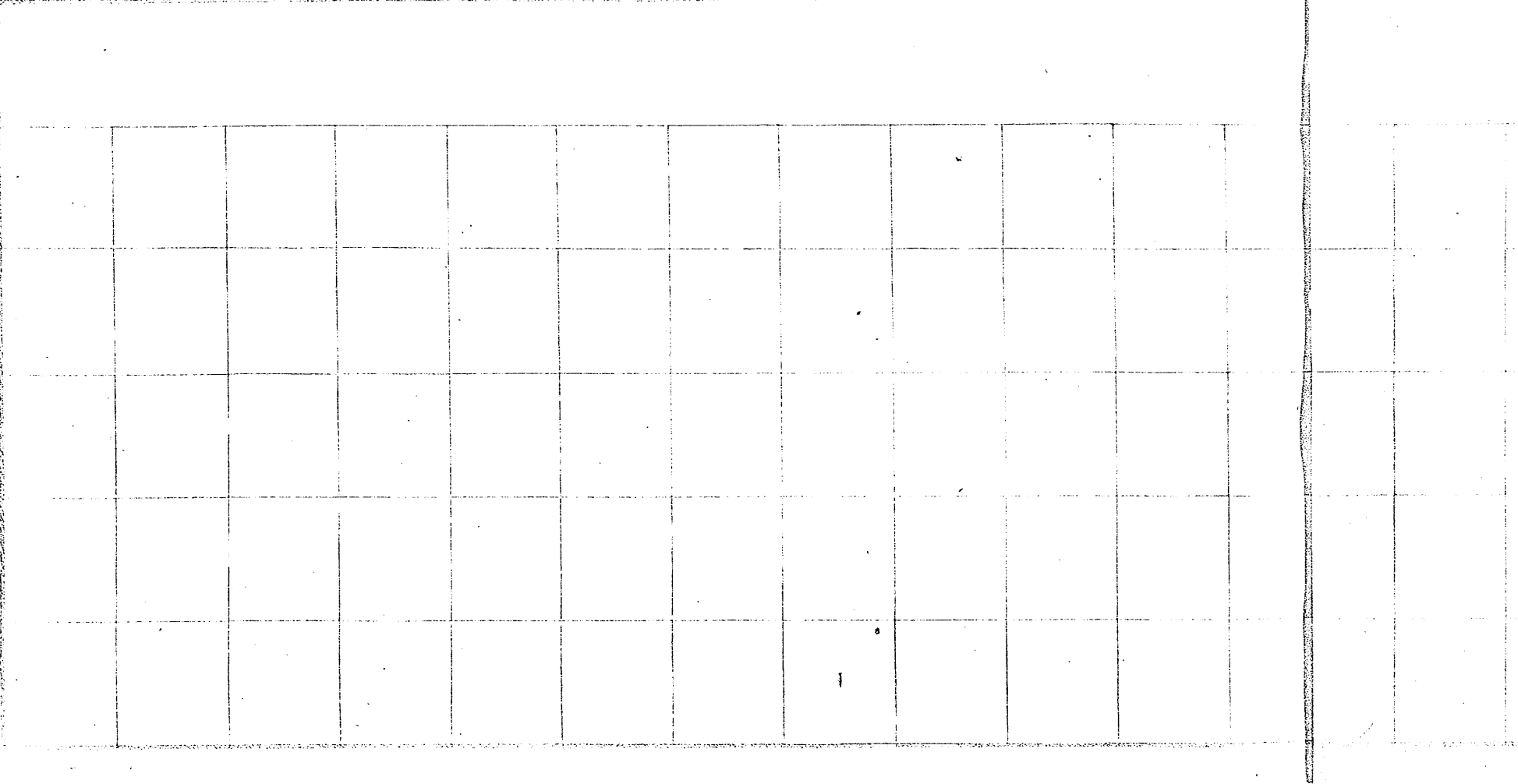
年

水	
---	--

一
德
一
心
而
世
濟
康
美
此
我
國
體
之



心二精華而教育之淵源亦實存于



益
謙
成
就
德
器
進
廣
公
益
開
務

忠孝節義

中等新編習字帖續編卷之壹(楷書)

御製 述懷

古乃文見留度爾於母富加奈己我治武流
久珥波伊可仁止

皇后陛下御製 慎獨

獨深美思布心廻善惡手照志和苦良牟天
地之神

教育勅語

朕惟我皇祖皇宗肇國宏遠樹德深厚我臣
民克忠克孝億兆一心而世濟厥美此我國
體之精華而教育之淵源亦實存于此爾臣
民孝於父母友於兄弟夫婦相和朋和相信
恭儉持己博愛及衆修學習業以啓發智能
成就德器進廣公益開世務常重國憲遵國
法一旦緩急義勇奉公可以扶翼天壤無窮
之皇運矣如是則不獨朕忠良臣民又足以
顯彰祖先遺風斯道也實我皇祖皇宗之遺
訓而子孫臣民之所可俱遵守也通之古今
而不謬施之中外而不悖朕庶幾與爾臣民
俱拳々服膺而咸一其德

御名 御璽 三島毅 謹譯

全第二卷(行書)

君子慎所交不貴尺璧重寸陰無遠慮者必
有近憂

符讀書城南 韓退之

木之就規矩在梓匠輪輿人之能爲人由腹
有詩書詩書勤乃有不勤腹空虛欲知學之
力賢愚同一初由其不能學所入途異問兩
家各生子提孩巧相如少長聚嬉戲不殊同
隊魚年至十二三頭角稍相踈二十漸乖張

明治三十年三月廿五日印刷
三月三十日發行



編輯者 森成眞
印刷者 森成眞
發行者 森成眞

眞野紀太郎
成瀨大城
森岡書店
東京市牛込區富久町九十九番地
東京市下谷區上根岸六拾番地
福岡市博多中島町五拾九番地
福岡市博多中島町

定價 自一之卷各金拾五錢
至三之卷

清溝映汗渠三十骨幣成乃一龍一豨飛翼
騰踏去不能顧蟾蜍爲馬前卒鞭背生蟲
一爲公與相潭潭府中居問之何因爾學
與不學歟金璧雖重實費用難貯儲學問藏
之身身在則有餘君子與小人不可辨父母且
不見公與相起身自舉動不見三公後寒餓
出無瞻文章豈不貴經訓乃當禽潰涼無根
源朝滿夕已除人不通古今馬牛而襟裾行
身陷不義况望多名譽時秋積雨露新涼入
郊墟燈火稍可親簡編可卷舒豈不旦夕念
爲爾借居諸思義有相泰作詩勸爾躊躇
中等第三卷(章書)

今日も種々さまざま内談可申儀數多候御した、めは是に
て御めされ候様御出可有候 毛利元就
御手紙被成下謹て奉拜見候か尋可被成御用の儀御座候間
早々貴宅まで參上可仕旨畏奉存候追付奉仕候以上
山鹿甚五右衛門
今晩俳諧御催し之處奉無之候間まいられず候連中へもよ
ろしく頼入候 松尾桃青

堪忍は身を守る第壹に候何事の藝術す堪忍なくしては致
去忍之候事もならぬ者にと候貴爵を正しくいたし疎きを
も恵み近きをも討す是仁の堪忍なり君に仕へて身命を顧
みす一度も約を違へす是義の堪忍也人の事を先にして身
の事を後にし起るよりねる迄行儀を正しくするこれ禮の
堪忍なり我に優して人をないろしるにする事をせず是智
の堪忍なり君父に仕ふるに始め初めにも表裏難薄を不
爲是信の堪忍也堪忍のなる事は十全に至らねば家をも國
をも起す事ならぬものなりたとへ十の内を九守り一
二破候へは破れし所にて夫れまでの堪忍は徒らに成行も
のにて候 徳川家康

朋友會合之際は言語の上重要にて候朋友互に益を求め仁
を輔くるためなり然るを無益の雑語に時を費すは益なく
まて損あるへし雑語の上より自然不遜にもなり争論をお
こす事も及候加様之儀一切無之様心かけらるべく候
佐藤一齊

